

個人の幸せだけでなく 社会全体の幸福を求めて

かわむらざいけん 河村瑞賢

河村瑞賢は、今から約400年前に、現在の南伊勢町東宮で生まれました。13歳の時、江戸へ旅立ちます。江戸に着いてからは、車力という仕事につきました。そして、20歳を過ぎると材木商へと転換します。

その材木商の時、江戸で明暦の大火（1657年）が発生し、木曾で大量の材木の買い付けに成功して、その材木を売り巨額の富を得て大商人となりました。明暦の大火後の江戸の復興には、建築請負業として活躍し、それが幕府の目にとまり御用商人となりました。

翌年の1658（万治元）年にも大火があり、幕府の命令によって運河の掘削工事や、橋の設置工事などで江戸の町の復興に活躍し、東北地方の米や物資の搬送航路の開発依頼を幕府から受けました。それが有名な東廻り航路、西廻り航路の開発で、従来の運搬方法より効率よく、早く東北地方の米や物資が江戸に届けられるようになりました。

また、この航路の開発によって、日本海側の物資が大量に大阪の町に集まり、大阪が「天下の台所」と呼ばれるようになりました。

その後、瑞賢は淀川河口の洪水の氾濫を防ぐための治水工事である安治川の掘削工事や銀山開発などに着手し、5代将軍綱吉にその功績が認められ、瑞賢の名声はさらに全国へ広まりました。



河村瑞賢（南伊勢町提供）

学習のめあて

河村瑞賢は、13歳で江戸に行き、様々な職業を経験しました。その後、商人の道を選び、成功をおさめ、幕府の御用商人となるなどして活躍しました。瑞賢は、自分の仕事だけでなく、幕府から命ぜられた仕事に対しても、適切な方法を考えて行動する人物であったと伝えられています。幕府から米や物資の搬送航路の開発や治水工事を命ぜられると、心身をなげうって任せられた仕事をやりとげようとしてきました。航路の開発では、従来よりも短期間に、安全で確実に輸送ができるようになるなど経済の発展に尽くしました。

瑞賢と同時代を生きた儒学者であり、政治家であった新井白石の著書の中にも、瑞賢の業績が書かれています。また、安治川のほとりに建てられた紀功碑からも、後の時代の人々が瑞賢の業績についてどのように考えていたかを知ることができます。

大商人として成功するだけでなく、社会の発展や公共の福祉のために働こうとした瑞賢の生き方をふまえ、働くことの意味について考えてみましょう。夢や目標に向かって働くという面だけでなく、勤労や奉仕を通して社会を支えるという生き方に焦点をあてて考え、話し合ってみましょう。

考えてみよう

- 1 河村瑞賢は、どのような事業を行ったのでしょうか。
 - 2 河村瑞賢は、なぜ、さまざまな事業に取り組んだのでしょうか。
 - 3 河村瑞賢の行った工事を、各地の住民はどのような思いで見っていたのでしょうか。
 - 4 河村瑞賢の人生は、どのような人生だったと言えるのでしょうか。
 - 5 河村瑞賢の社会全体の幸福を求めた生き方について考え、話し合みましょう。
 - 6 職場体験活動やボランティア活動、福祉体験活動などの経験から、働くことの意味について考えてみましょう。
 - 7 自分たちの住む地域や国の発展に努めた人物について調べてみましょう。
- ☆ 第1部の『考えよう「働く」ということ（P108～111）』を活用し、勤労の意義や公共の福祉について考えてみましょう。

1670（寛文10）年、徳川幕府4代将軍家綱の頃、河村瑞賢は東北地方の米を江戸に運ぶ仕事を命ぜられました。

当時米を運ぶ方法としては、船か大八車で運ぶかの2つに1つでしたが、船では嵐にいたり、座礁したりするなどの危険がつきまっています。

大八車で運ぶのは安全ですが、時間がかかりすぎたり、人手も費用もたくさんかかり、その上一度にたくさん運ぶことができません。

それで、瑞賢は、あくまで商人としての立場から、一度に多くの米が運べて、しかも、もうけの多い方法をと考えてみましたが、やはり、船しかないと判断しました。そこで、さっそく新しい大きな船を造り、腕のよい船頭を集め、船の安全な航路の調査にとりかかりました。

こうした瑞賢達の苦勞がむくわれ、船は江戸、東北間を無事に往復することができるようになりました。この航路は、東廻り航路と呼ばれています。

1672（寛文12）年には、東廻り航路開発の経験をもとに、西廻り航路の開発をおこないました。

この2つの航路の開発は、東北地方の米を江戸に運ぶだけでなく、日本各地の米や特産物を全国に運ぶことができるようになり、人々の生活が少しずつ変化していく大きな原因ともなりました。

瑞賢の商人としての評判は、2つの航路を開発した実績からも、どんどんあがり、多くの大名が瑞賢の計画性と判断力、そしてすぐれた才能をみこんで、先をあらそっていろいろな仕事をたのみにくるようになりました。そのような仕事の中の1つに、川の洪水を防ぐための改修工事がありました。

「南島人物誌本」（南島町教育委員会）、ほかから作成

新井白石は、「畿内治河記」という本の中で、瑞賢が畿内の水害の難を除いた功績をたたえて、次のようなことを述べています。

「昔から水害で荒らされてきた田は、今では肥えて作物がよくできる地になった。川のほとりの人々は、はじめて苦しみからのがれ、種をまき、作物の栽培に精を出している。人々は、声をそろえて喜び合い、工事をほめる声は野に満ちている。川のほとりに住む人々の喜びだけでなく、南海・西海諸島からやってくる船も心地よく乗り入れできるようになった。誠に国家の喜びであり、人々の暮らしを永久に支えることになる。昔から今までに、こんなに大きな功績をたてた人はいたろうか。」



安治川のほとりにある紀功碑

白石のことば通り、瑞賢の業績は今も生きて人々の暮らしにかかわっています。大阪の人々は、その功績をえ、1915（大正4）年8月安治川のほとりに写真のような大きな紀功碑を建て、その偉功を偲んでいます。

「商人をこえた日本の偉人 河村瑞賢」（南島町教育委員会）から作成